

アイヌの景観史

― 上川盆地の地形・生態系適応の歴史を例に

瀬川 拓郎

はじめに

札幌大学の瀬川と申します。私が専門とする考古学は、歴史学の分野の一つですが、同じ歴史学に属する文献史学とは視点が異なります。文献史学が文字の記録を基に歴史を探究するのに対し、考古学は遺跡を発掘し、発掘するとまず、どうしてその遺跡がそこにあるのかを考えます。その場合、例えば周辺の動植物の分布状況や地形などから当時の暮らしを復元していきます。

私は、旭川という場所に長く住み、この地のアイヌ民族の歴史について調査・研究をしてきました。それはとりもなおさず、北海道中央部の上川盆地に位置する旭川の自然環境のなかで人間がどう生きてきたかを考えてきたということを意味します。

本日の学習会では、旭川の自然環境に適応し形成されていたアイヌの人々の暮らしの場に、ある

時期から和人が入植して近代都市が形成されていくなかで、アイヌの人々の暮らしはどのように変化していったのか、すなわち、旭川のアイヌ民族が直面した近現代について、上川盆地の地形や周辺の生態系の視点から考えてみたいと思います。

1. 上川盆地の地形の特徴

本学習会のテーマの舞台になるのは上川盆地です。ここには現在、一市八町（旭川市、鷹栖町、東川町、東神楽町、美瑛町、比布町、当麻町、愛別町、上川町）が分布しています。

上川盆地は、大雪山系から流れ出るいくつもの河川によってつくり出された平野部です。主な河川としては、石狩川、忠別川、美瑛川が挙げられ、これらを「上川盆地の三大河川」と総称することもあります。大きくは石狩川扇状地と忠別川扇状地という二つの扇状地から成り、この二つはそれぞれ

れ道内でもかなり広大な面積を有する扇状地です。

二つの大きな扇状地から成る上川盆地には、河岸段丘が広範に形成されています。河岸段丘は段丘面と段丘崖から成ります。上川盆地の場合、大きくまとめると、以下の三つの段丘面があります。すなわち、①山地も含めた高位段丘面、②中位段丘面、③河川との比高差がほとんどない低位段丘面あるいは氾濫原です。

このうち低位段丘面について言うと、大正時代（一九一〇年代）に販売された絵はがき（旭川市博物館所蔵）に石狩川を写したものがありますが、この画像の中に当時の旭川の低位段丘面の様子が見て取れます。大正時代といえは旭川の市街地はすでに開発が相当進んでいましたが、低位段丘面は、河川氾濫が頻繁に起こっていたために、後に河川改修が行われるまではほとんどが低開発地として取り残されていました。そのため、当時の低位段丘面の景観といえは、広大な草原の中に湿地

資料 北海道の考古学年表

北海道		本州(四国・九州)		
旧石器時代		旧石器時代		
縄文時代		縄文時代		草創期
				早期
				前期
				中期
				後期
晩期				
道東	道南	弥生時代		
続縄文時代(前期)				
500	鈴谷文化	古墳時代		
	続縄文時代(後期)			
700	オホソク文化	飛鳥時代		
	擦文時代	奈良時代		
900		トビニタイ文化	平安時代	
1100				
1300	アイヌ文化	鎌倉時代		
		南北朝時代		
1500		室町時代		
		安土桃山時代		
1700		江戸時代		

※ 瀬川拓郎著『アイヌの歴史』(講談社、2007年)17頁より引用。

や沼が広がっているというものでした。画像にはヤナギの高木も写されていますが、樹木が生えているのは川縁だけであり、その外側には湿原が広がっていました。

中位段丘面について言うと、現在の旭川の市街地にはほとんど段差や坂がないと言われますが、よく観察してみると、住宅街の中にコンクリートで護岸された崖が部分的に残っています。崖の上は比高差にして二メートルほどあり、崖上に広がっているのが中位段丘面です。

高位段丘面について言うと、旭川市西部の忠和地区に二〇一六年まであった東海大学旭川キャンパスは、雨^{あめ}紛^ま台地と呼ばれる高位段丘面の先端部にありました。高位段丘面と中位段丘面の比高差

は四〇メートルほどあります。

2. 上川盆地に形成された縄文エコシステム

上川盆地の地形の特徴を以上のように把握した上で、まず、縄文時代の人々が上川盆地でどのような生活をしてきたかを見ていきたいと思います。上川盆地の縄文時代の遺跡は四〇〇カ所ほどが発見されています。集落遺跡は中位段丘面の縁辺部もしくは高位段丘面の縁辺部に集中する一方で、低位段丘面では発見されていません。低位段丘面で見つかった遺跡の一つを発掘してみました。そこ、それは集落の跡ではなく、石狩川に寄って鹿を追い込む落とし穴、すなわち、猟場の跡で

した。低位段丘面も縄文時代にはすでに段丘面として存在していましたが、人が住む環境としては選ばれなかったということです。その理由は河川の氾濫地帯だからです。

縄文時代に集落が形成された地形や環境がどのようなものだったのか、市北部の春光台地区で発見された縄文遺跡の分布を調べると、いくつかの特徴が見出されました。この地区の遺跡も高位段丘面もしくは中位段丘面の縁辺部に立地していますが、集落の跡は、丘の上からの湧き水が小川となって流れ下り、小さな半円形の扇状地をつくった場所がありました。春光台の縁辺部は縁に沿って湿地が続いていて、基本的に人が住むのに適さないところなのですが、所々にある小さな扇状地や丘の上の湧き水の周辺などに縄文の集落が形成されていたようです。

3. 擦文時代のアイヌ・エコシステムの成立

次に、縄文時代の後に当たる擦文時代以降に、上川盆地に暮らしていたアイヌの祖先の人々が、どのような生活をしてきたかを見ていきたいと思います。

(1) サケの生態系適応による石狩川水系の集落形成

擦文時代は、縄文時代、続縄文時代に続く北海

道史特有の時代区分で、七〜一三世紀とされます。その中期は一〇〜一一世紀頃、本州では平安時代に当たります。

上川盆地では擦文時代の遺跡も発見されていますが、縄文遺跡と比べると、分布状況が全く異なります。前述のとおり、縄文時代の集落遺跡は高位段丘面と中位段丘面にしかなかったのに対し、擦文時代の集落遺跡は低位段丘面にしかありません。擦文時代の人々は、河川が氾濫を繰り返すような場所に住んでいたということです。しかも、低位段丘面の中でも石狩川筋の限られた場所にかありません。

なぜ上川盆地の擦文時代の集落遺跡は、石狩川筋の限られた場所しか発見されないのか。その理由については、発掘調査から以下のように推定されています。

石狩川筋にある擦文遺跡は列状に並んでいます。石狩川の氾濫原であったこの地域には、かつて石狩川の支流である小川が幾筋も流れていたのですが、実はその小川沿いに擦文時代の集落がありました。現在の陸上自衛隊第二師団の駐屯地（旭川市春光町）内には湧き水がつくった池があり、そこから駐屯地の敷地外へ小川が流れ出ていますが、擦文時代の集落遺跡はこの小川沿いにも分布しています。この小川は、今でこそ水量は非常に少なく、どぶ川のようになってしまうことが、実はかつては上川盆地で最大のサケの遡上量を誇った川でした。

石狩川を遡上するサケは最終的にどこを産卵場所としてめざしていたかと言えば、第二師団駐屯地内にあるような、湧き水の池なのです。サケが遡上するこのような池のことを、アイヌ語で「ムム」といいます。ムムの意味は、元々は「湧水池」ですが、サケが遡上してくるので、「サケの産卵場」と同義語になっています。

旭川市西部の地域で、アイヌの人々が元々「ムム」と呼んでいた場所は、明治時代に製作された地図などで調べたところ、四カ所ありました。ムムの集中的な分布域は、扇状地の扇端湧水帯に当たります。この旭川市西部の地域にムムが集中するのは、二つの扇状地（石狩川扇状地と忠別川扇状地）から成る上川盆地の地形上の特性によりです。周囲を山地に囲まれていることにより、本来は下流域に向かって広がっていくはずの扇が山地に阻まれ、二つの扇状地の扇端湧水帯がこの狭い範囲に凝縮されています。

擦文時代の集落遺跡は扇端湧水帯のムムの集中する地域に集まっています。つまり、集落の集中はサケの遡上と関係していることがうかがえます。そのことを裏付ける例として、「錦町5遺跡」（旭川市川端町）という一〇世紀の集落遺跡があります。ここの竪穴住居を掘り起こすと、石狩川の氾濫で運ばれた白い砂が何層も堆積しているのですが、あわせてサケの骨の化石も大量に出土します。縄文遺跡を発掘しても、サケの骨はほとんど出てきません。つまり、サケの需要が拡大する

のは少なくとも擦文時代中期以降であり、擦文時代の集落遺跡が「サケの産卵場」であるムムの近辺から発掘されるのは、そのことを意味していると考えられます。

一〇世紀頃からサケの大量捕獲・消費を始めるのは上川盆地だけでなく、札幌でも同様の状況が見られます。札幌市内では、縄文時代の遺跡は円山や月寒丘陵など至る所で出土していますが、擦文時代の遺跡は非常に限られた地域でしか出土していません。出土した地域の一つは、現在で言えば北区の北海道大学の構内、かつての琴似川の流域です。現在は北海道大学植物園などがある地域（札幌市北区）が元々は扇端湧水帯で、かつてはムム（湧水池）があり、ここから湧き出た水が低湿地帯に向かっていくつもの小川となって流れ下っていたのですが、琴似川はその一つです。この川沿いに一〇〇〇軒ほどの竪穴住居の集中域があり、明治時代にはまだ窪地として見ることができたようです。

以上で見たように、擦文時代中期の集落遺跡は、ムムから流れるサケの遡上河川の付近につくられています。旭川の遺跡でも、札幌の遺跡でも、その河川が流れていたところからサケの遡上止めを目的とした杭が見つかっています。それはこの場所に漁場があったことを表しています。竪穴住居はこの杭（漁場）の近くから見つかっています。

石狩川水系に位置する擦文時代の集落は、概ね札幌、恵庭・千歳、旭川の三地域に集中していま

す。石狩川水系におけるサケの三大産卵場といわれる地域です。これらの地域にある集落はいずれもサケの漁村になっており、縄文時代の集落とはかなり様相が異なります。逆に、同じ石狩川水系でもサケが遡上しなかった河川の流域では、擦文時代の集落遺跡はほとんど見つかっていません。擦文時代の石狩川水系にあった集落は、サケの生態系と密接不可分なたちで展開していたことが推測できます。

(2) 本州向け商品生産に対応した生態系適応の拡大

擦文時代における集落形成の生態系適応上の劇的な変化は、実は石狩川水系だけで起きたわけではなく、一〇世紀頃に全道で一斉に起きています。この時期、北海道の内外では以下のようなことが起きていました。

まず、古代から中世にかけて（八～一五世紀）、北海道で暮らしていたアイヌ民族あるいはその祖先の人々が活動領域を大きく拡大させています。本州では奈良時代に当たる八世紀頃、アイヌの祖先の人々は北海道全域では生活していませんでした。元々は全道に広がっていたのですが、五世紀頃、オホーツク人という異民族がサハリンから南下してきたため、これを避けるために道東・道北からは退去していったのです。これが一〇世紀以降になると一転し、オホーツク人を同化しながら、

自分たちの活動領域を拡大していく過程に入ります。その結果、活動領域は北海道全域にとどまらず、一一世紀にはサハリン南部へ、一五世紀にはカムチャツカ半島南部を含む千島列島全域にまで拡大していました。

一〇～一五世紀にアイヌ民族が活動領域を再度拡大させていく背景としては、以下のようなことが考えられます。

まず、擦文時代中期の一〇世紀、彼らはそれまでオホーツク人が暮らしていた道東のオホーツク海側へと進出しています。本州ではこの頃、オオワシの尾羽が弓矢の矢羽に使われるようになっていました。例えば、『聖徳太子絵伝』という作品には、「蝦夷」と呼ばれたアイヌの人々が、オオワシの尾羽を腰巻きやケープのように纏う姿で描かれています。奈良や京都にいた当時の日本人にとつて、北に住む蝦夷と呼ばれる人々は、オオワシの尾羽を纏う人と認識されていたことがうかがえます。また、合戦絵巻『平治物語絵詞』に描かれている武士たちを見ると、彼らの背負う矢の矢羽にもオオワシの尾羽が使われていることが見て取れます。本州ではこの当時、オオワシの尾羽が大量に消費されていたということです。こうしたニーズに対応してオオワシの尾羽を大量に入手しようと思つたら、オオワシの棲息地に行く必要があります。

日本国内でオオワシが最も多く棲息するのは道東のオホーツク海側に他なりません。ロシアの沿海州で繁殖したオオワシは、冬になると、

サハリンを経由して道東のオホーツク海側に南下してきます。一〇世紀頃、アイヌの祖先たちが道東に進出していった背景には、オオワシの尾羽を本州に出荷するためだったのではないかと考えられます。

また、アイヌの人々は一五世紀には千島列島から北千島、カムチャツカ半島まで進出しています。この時期に本州で書かれた歴史書（『後鑑』の一四二三年の記事、『大乘院寺社雑事記』の一四八三年の記事など）には、ラッコの毛皮に関する記述が出てきます。非常に優れた毛皮とされ、日本から中国への輸出品にもなっていたようです。日本から最も近いラッコの棲息地は、得撫島を中心とした北千島の地域です。アイヌの人々が一五世紀に北千島に進出したのは、ラッコの棲息地に行つてラッコを捕り、その毛皮を本州に出荷するためだったと考えられます。

このほか、一〇世紀半ば以降には、道南の奥尻島への進出も見られます。ここではアシカとアワビを徹底的に捕っていました。当時、アシカの毛皮、干しアワビは本州では商品価値を有するものでしたので、これも背景には本州のニーズへの対応が考えられます。

やや時代が下り、一五世紀頃の遺跡の中には、エゾシカの骨が大量に出土するところもあります。陸別町にあるユクエビラチャシという遺跡には、一万頭ものエゾシカの骨が埋もれています。日本国内はこの時期は戦国時代に当たり、武器や馬具

の材料としてシカの毛皮などが大量に消費されており、四国・九州・東北地方の山間部では徹底的にシカが捕られたほか、それだけでは足りず、東南アジアから毎年のように何十万枚ものシカの毛皮が輸入されていました。アイヌの人々が北海道からエゾシカの毛皮を本州に出荷していたという文字の記録は今のところ見つかっていませんが、陸別の遺跡の状況などを踏まえると、恐らく、道東ではエゾシカを大量に捕り、その毛皮を本州に出荷していたのではないかと考えます。

以上で見てきた、一〇世紀以降に道内各地で始まる、商品生産に特化した生態系適応のことを、私自身は「アイヌ・エコシステム」と呼んでいます。

4. 近世期におけるアイヌ・エコシステムの深化

一〇世紀以降に成立してくるアイヌ・エコシステムは、本州向けの商品生産への対応を原動力にしながら、一五世紀までに北海道全域および北海道周辺の地域にまで拡大しました。これが近世期（江戸時代、一七〜一九世紀）に入つてどのように展開していくのか、上川盆地を例に見ていきたいと思います。

一九世紀の上川アイヌの集落の位置を、松浦武四郎の残した記録などに基づいて特定すると、擦文時代に比べて集落数は増え、分布域も広がっていました。擦文時代は前述のとおり石狩川水系の

メムの集中する地域にしかなかったのが、近世期には石狩川の上流部や忠別川の流域にも形成されるようになっていました。とはいえ、擦文時代と近世期で変わっていないこともあり、それはいずれも低位段丘面において集落が展開していたという事です。和人が入植する前の一八八四（明治一七）年に書かれたアイヌ集落の絵を見ると、石狩川の畔の低位段丘面（現在の緑町付近）に住居、クマの檻、サケの干し場が描かれています。

上川アイヌが低位段丘面に暮らしていた理由は、松浦武四郎の描いた一枚の絵（『蝦夷訓蒙図彙』所収）からもうかがい知れます。この絵では上川アイヌのメムでのサケ漁の様子が描かれ、数頭の犬が川に入つてサケを捕っている場面です。当時の上川アイヌの家庭では、一軒あたり五〜七頭の犬を飼い、子犬の頃から訓練してサケ漁の技術を仕込んでいました。この一軒あたり五〜七頭の犬が一シーズンで捕ってくるサケの数は二〇〇尾にも及んだと、松浦武四郎は伝えています。一軒の家庭では食べきれぬ量はなく、商品としての出荷が前提となっていることがうかがえます。

また、松浦武四郎が一八五七（安政四）年に描いた絵「テツシンの図」には、上川アイヌが石狩川の本流で行っていたサケ漁の様子が描かれています。テツシはサケを捕るための仕掛けのことで、川の流れの中に杭を何本も打ち、岸近くに設けた台の上にサケを追い込み、鈎鉈で捕る漁法です。これは実は効率の良いくない漁法ですが、江戸時代

末期には、漁の条件の良いメム以外の地域にも広くこうした仕掛けを設けて、サケの漁場の開発をしていたということです。

明治時代が始まった頃、和人の入植が始まる直前の上川アイヌはどれほどの数のサケを捕っていたのか、開拓使が調査しています。これによると、一八七二（明治五）年の段階で、上川アイヌ六八戸（約三〇〇人）で年間約九万尾（一戸当たり約一三〇〇尾）を捕っていたそうです。前出の松浦武四郎の報告を踏まえると、近世後期以前には、一戸当たり年間三〇〇〜五〇〇尾、集落としては約二万尾を捕獲していたと推定されています。

これらのサケは、基本的に「干鮭」という乾燥加工品に加工され、本州に出荷されました。一軒当たり数千尾という規模で捕獲されたサケは、内蔵の処理後、まず日干しにされ、その後屋内に運ばれて囲炉裏の火で燻され、倉庫内で一冬を越え、翌春に丸木舟で石狩川の河口に移送されました。当時の上川アイヌが低位段丘面という劣悪な環境にあえて集落を構えたのは、膨大な量のサケの加工作業を遂行するために、住居と漁場を別々に設けることができなくなっていたからです。つまり、集落が漁場であり、加工基地であり、流通拠点でもあったため、劣悪な環境であっても、漁場のある低位段丘面に住まざるを得なかったということです。

上川アイヌは全体で三〇〇人規模の集団でしたが、集落としては以下の三つのグループに分かれ

ていました。すなわち、石狩川上流グループ、石狩川下流グループ、忠別川（下流）グループです。上川盆地でサケが遡上する河川は石狩川と忠別川だけであり、その二つの川筋に上川アイヌは三グループに分かれて集落を形成していたということです。

全体で三〇〇人ほどの上川アイヌが、サケの遡上する二つの川筋にあえて三つのグループに分かれて集落を展開していたこともサケと関係していると考えられます。実は三つのグループの集落は、いずれもメモ川サケの産卵場に立地していました。アイヌ民族の昔もしくは聖域などと解釈されているチャシは上川盆地にもいくつかあります。所在地は三グループの各集落に対応しています。擦文時代に成立したアイヌ・エコシステムは、江戸時代の終わりにはサケの生態系にさらに特化するかたちで深化し、擦文時代には重要視されなかつた二次的な遡上河川や産卵場も、江戸時代の終わりには余さず開発・利用される状況になっていったことがうかがえます。

あわせて、上川アイヌの社会の成り立ちには、丸木舟の利用、すなわち流通も深く関わっていたようです。松浦武四郎の残した記録に、上川アイヌの丸木舟の往来についての記述があります。丸木舟で河川を移動する場合、一つの丸木舟でどこまでも移動が可能ではなく、限界があります。丸木舟自体のつくりや用途にもよりますが、岩の露出、流木の量、流水量などの環境の変化に

より、使用の可否が左右されます。実は上川アイヌの三グループの集落の分布状況は、丸木舟の遡上限界に対応しています。石狩川下流グループと忠別川下流グループの遡上限界は浅川用丸木舟の遡上限界に対応し、石狩川下流グループと上流グループの活動領域の境界は浅川用丸木舟と急流用丸木舟の乗り換え地点に対応しています。

5. 近代以降の和人のエコシステムの開発・定着

明治期に入ると北海道への和人の入植が本格化し、上川盆地にも和人が入り込んできます。和人が上川盆地に構築した都市の景観は、高位・中位・低位の段丘面ごとに以下のような特徴が見られます。

(1) 中位段丘面に市街地を建設

上川盆地への入植は、一八九一（明治二四）年の永山兵村の入植、一八九二（明治二五）年の旭川兵村の入植および旭川市街地の形成、一九〇〇（明治三三）年の陸軍第七師団の配備と、計画的に進められてきました。これらはすべて中位段丘面に建設された和人の都市です。

和人が入植した中位段丘面は、河川氾濫が及ばないために植物がよく生育するという特性を有し、大森林地帯になっていました。和人たちがあ

えて中位段丘面に入植した理由としては、平坦で広大な面積を有するため都市空間の実現に不可欠であること、比較的硬い粘土質の土壌であるため水稲耕作に適しているということです。上川盆地での水稲耕作は、一九〇〇（明治三三）年に旭川兵村で始まり、わずか一七年後には盆地内の中位段丘面全体に広がりました。逆に水田化しなかつたのは、陸軍第七師団の駐屯地、近文・雨紛・神楽台地の上の高位段丘面、三大河川の流域の低位段丘面です。

旭川の市街地は、札幌の中心市街地などと同じように条里区画がされ、いわゆる五番の目になっています。条里区画の起点は現在の旭川赤十字病院（旭川市曙一条）の傍にあります。ここに市街地の起点が置かれた理由は、中位段丘面の西端だからです。ここから西方にある番外地は低位段丘面です。『旭川市史稿・上巻』（一九三二年）には、「月を經るに従ひ、移住者増加すべきを想ひ、今の市街地にて狭隘を感じし時、西方より漸次東方に及し、大市を成すに差支なからしめん為め」と記述されています。将来的に市街地が東に向かって中位段丘面の上を拡大していけるように、条里区画の起点を西端の低位段丘面との境に置いたという事です。

(2) 賤視空間化した低位段丘面

条里区画の起点の西側に広がる低位段丘面上の

番外地は、長らく開発が進まず、大正時代まで低開発地として取り残されていくことになります。この地域に住宅が増え始めるのは、第二次世界大戦後、石狩川に土手が築かれて、河川氾濫による水害の発生が抑えられるようになってからです。とはいえ、そうなる以前に全く利用されていなかったわけでもありません。

一八八〇年代以降、低位段丘面に位置する忠和地区、近文地区、曙地区は、一言で言えば賤視空間化され、以下のように利用されました。

忠和地区は、一八八九（明治二二）年以降、空知集治監（三笠市）などの囚人を投入しての農地開発が進められました。その引き上げに伴って民間への農地の貸し下げが行われましたが、大水害（一八九八年九月など）によって入植者はすべて転出してしまいました。その後の開墾はほとんど進まず、牛の放牧場などとして利用されました。曙地区は、一般の人々は住まず、一八九八（明治三一）年に遊郭が設置されたほか、安宿や風呂屋が建ち、柂屋や馬車道といった下層の人々が住み着くようになりました。

近文地区はアイヌ給与予定地に設定され、石狩川・忠別川筋に広く集落を形成していた上川アイヌの人々はすべてここに強制的に移住させられました。近文に集められたアイヌの人々は農業への従事を強いられますが、河川氾濫が繰り返し起きたこともあって、最終的に農業で自活できるほどになった人はほとんどいませんでした。当時の記

録によると、一八九八（明治三一）年の大水害では、鷹栖村（近文地区を含む）の家屋流出の三四％が「土人家屋」であり、給与地の被害が激しいのですが、耕地被害では給与地は二％に過ぎず、農地開発の遅れがここに示されています。そもそもこの地域は当時、河川氾濫が毎年のように起きる地域であり、農業に適した土地ではなかったという事です。

大正時代（一九一五年頃）に旭川で販売されていた絵はがきには、必ずといっていいほど、上川アイヌの人々の写真と、浸水する曙遊郭で助けを求める遊女の写真が含まれていました。いずれも当時、低位段丘面で生活していた人たちです。

(3) 神域化した高位段丘面

高位段丘面に当たる神楽台地の先端部は、現在は上川神社を含む旭川市神楽岡公園がある場所ですが、元々は一八九九（明治二二）年に天皇の離宮（夏の別荘）造営が計画されていた土地であり、宮内省の動植物調査なども行われていました。

なぜ高位段丘面が天皇の空間になるかと言えば、人民の空間を見ることが、すなわち、「国見」をするのに適した立地だからです。前出の『旭川市史稿・上巻』には、「上川市街はチュプベツ川（忠別川）を隔て、屯田兵屋は遠く圃中に露見し（中略）満野の風景一望の中」という記述があります。実際に、一九一一（明治四四）年に皇太

子（後の大正天皇）がここを訪れ、神楽台地に立つて国見を行っています。その様子については、『上川神社誌稿』という文書に、「本市民櫛比の状況を台覧あらせられ、上川平原の禾穀穰々たるを御展望あらせられた」と記されています。

その後、一九二三（大正一二）年をもって上川離宮の建設計画は頓挫し、中位段丘面に建てられていた上川神社が縣社に昇格させられ、翌年には離宮の建設予定地に移転されてきます。このように、戦前期の上川盆地では、高位段丘面である神楽台地は神の空間とされていたと言えます。

神楽台地は一九七〇年代以降、宅地造成が進んで市営住宅やニュータウンの開発が本格化し、一般市民の移住が進み始め、いわば天皇の空間から市民の空間へと変化し、今日に至っています。

以上をまとめると、明治期以降に和人が入植してくるなかで、上川盆地の段丘面は以下のように変化したと整理できます。

中位段丘面は、近世期まではアイヌの人々も暮らしておらず、森林地帯となっていました。明治期以降は、市民が暮らし、水稻耕作が活発に行われる土地になり、いわば「正統な国民の空間」として整備されたと言えます。

低位段丘面は、近世期まではサケの生態系に適応してアイヌ集落が分布していたところですが、明治期以降、当初は低開発地として取り残され、一九世紀末頃からは和人社会の中では下層とみな

された人々の居住する「賤視空間」として利用されませんでした。

高位段丘面は、明治期以降、天皇の離宮の建設計画が持ち上がったたり、同計画が頓挫した後は上川神社が移設されたりする「神の空間」とされました。

このように、上川盆地の地形というものは、明治期以降、ヒエラルキー（階層）を持ったかたちで構造化されてきたのではないかと見ています。言い換えれば、段丘面の形成する景観それ自体が、「国民」を創出する装置として機能したとも言えます。

6. まとめに代えてー上川盆地での近代の実現の意味

以上、縄文時代の人々、古代から近世のアイヌ民族、近代以降の和入集団のそれぞれについて、上川盆地の土地利用の特徴について見てきました。段丘面の利用のしかたはすべて違っていたことが明らかになってきています。

縄文時代の人々は、身のまわりにあるものを必要に応じて、特定の資源に偏ることなく、適宜利用できる環境にありました。その生活の中心は森林であり、森林生態系のもたらす資源を利用して生きていたと言えます。道内を見ると、縄文時代の遺跡が出土しない市町村はありません。逆に言えば、海辺だろうが、内陸だろうが、山奥だろ

うが、どここの地域でも多様に柔軟に生きていったということですが。

ところが、擦文時代中期に当たる一〇世紀以降になると、この時代の遺跡が出土している市町村の方がはるかに少ないと思います。限られた地域にしか擦文集落は存在しなかったということですが。それは例えば、サケの捕れる石狩川水系の流域や、オオワシを捕って尾羽を調達できる道東のオホーツク海側など、和入向けの交易品・商品を生産できる場所に擦文集落の分布域が限られているからです。縄文時代に比べて利用される資源が偏っており、上川盆地の場合、河川を遡上するサケ漁が中心になっていました。上川アイヌは漁民であり、交易民だったと言えます。

明治期以降に入ってきた和人は、農耕民として中段段丘面の平坦地を利用しつつ、高位・中位・低位の段丘面にそれぞれ異なる社会階層の人々を住まわせ、都市の整備を進めました。

アイヌ・エコシステムと和人のエコシステムとの間には大きな断絶があります。そのことは森林と河川の扱われ方を見るとよく理解できます。

縄文時代の人々が生活に利用していた森林は、和人の入植後に一気になぎ取られました。和人の進める市街地・農地の開発において森林は全く無用だったということです。上川盆地の固有な森林生態系は、和人の中では全く認識されておらず、本州と同じ環境を上川盆地につくり出すための単なる土地にされました。

また、古代以降の上川盆地の人々は河川生態系に適応して生きていましたが、河川は和入植後においてはサケの生産上および流通上の意味を失いました。サケ漁は沿岸部だけに集約されるようになり、流通は舟運から道路へと転換されたからです。そうすると、河川は都市部に水害をもたらす支障物件でしかなく、単なる水路として徹底的な管理下に置かれるようになりました。

以上のように整理すると、上川盆地に訪れた近代は、上川盆地の固有の生態系やこれに適応した固有の生活スタイルを全く無化し、無主性・無名性に置き換えてしまうことで実現したのではないかと考えます。そうであれば、アイヌ民族の同化政策は、サケ漁や狩猟の禁止のような問題があることもさることながら、彼らが古代以来確立・立脚してきた生活基盤を奪ったという意味で、もっと深いレベルで極めて深刻な問題を引き起こしていたと考えています。

△せがわ たくろう・札幌大学教授▽

本稿は、二〇二二年二月二六日に開催した、北海道近現代史研究会・第六回学習会の内容をまとめたものです。 文責・編集部